

外国人財とその家族への オンライン WEB 会議システムを活用した 日本語授業の発展性に関する研究

石川 陽子

A Study on the Future Development of Japanese Language Classes for Foreign Workers and Their Families Using Online Web Conferencing Systems

Yoko ISHIKAWA

はしがき

外国人財とその家族への Zoom などのオンライン WEB 会議システムを活用した日本語授業（以下、オンライン授業）はコロナ禍に急速に普及し、多くの日本語授業がオンラインで実施された（2023年8月に筆者が独自に行なったアンケートでは64.5%の日本語教師がオンライン授業をしていると回答している）。日本語教師の多くがオンライン授業を経験したが、2024年2月に筆者が実施した「日本語教師向け授業実態調査」によると、36.3%が担当授業の全てが対面形式授業に戻っており、加えて18.7%が対面形式授業の方が多いと回答している。

また、担当している授業がオンライン授業のみと回答した日本語教師は19.7%に減少している。これらの結果から、コロナ禍が明けて、多くの日本語教師の授業が対面形式に戻っていることがわかった。

しかしながら、日本国内は、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒は約10年間で1.8倍増（令和3年度に5.8万人超）¹。また、日本で就労する外国人は2,048,675人（令和5年）、重ねて、2023年3月、岸田文雄首相は政府の教育未来創造会議で2033年までの留学生に関する目標を示し外国人留学生を40万人受け入れることを発表している²。一方で、日本語教師の数は44,030人（令和4年）であり、対面形式で行う日本語授

業だけでは到底補いきれない³。

本稿の研究目的は、オンライン日本語授業を拡張発展させるうえで、どのような課題があって、それを解消するためにどのような方策手段が必要なのか調査し、解明することにある。

第1節 オンライン日本語授業に関する先行研究について

外国語教育では、日本語教育に限らずオンライン授業の先行研究が2000年代中頃から見られ、近年では日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関し担当講師を対象とした研究（藤本2019）が行われ、オンライン授業における「やりづらさ」に焦点を当てたインタビューが行われている。また、大学の日本語教育副専攻コースにおける教育実習生を対象とした研究（末繁2022）では、教育実習のオンライン化のプロセスと実習の実践について報告がなされ、教育実習生がオンライン授業を実施する中で気づいた、大人数のオンライン実習においては、対面形式に比べ、視覚情報から学習者の様子を把握し、即座に臨機応変に対応することがより難しい状況にあるという実施上の問題が示された。しかしながら、オンライン授業が発展しないとは結論づけられていない。

また、日本語教育プログラムをオンライン授業に移行したことによるオンライン教育のメリットと課題（河内他2021）の研究・分析結果からは日本語学習者のオン

¹ 外国人児童生徒等教育の現状と課題（令和4年12月文部科学省総合教育政策局 国際教育課）

² 「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和5年10月末時点、厚生労働省）

³ 令和4年度 日本語教育実態調査（令和5年7月文化庁 第120回日本語教育小委員会）

図1 レイヤーモデル

eラーニングの質	達成指標	主なID技法
レベル3： 学びたさ (魅力の要件)	継続的な学習意欲、没入感、つい余分なことまで、将来像とのつながり、自己選択・自己責任、好みとこだわり、ブランド、誇り	動機づけ設計法 (ARCSモデル) 成人学習学の原則
レベル2： 学びやすさ (学習効果の要件)	学習課題の特性に応じた学習環境、学習者ニーズにマッチした学習支援要素、共同体の学びあい作用、自己管理学習、応答的環境	学習支援設計法 (9教授事象) 構造化・系列化技法
レベル1： わかりやすさ (情報デザインの要件)	操作性、ユーザビリティ、ナビゲーション、レイアウト、テクニカルライティング	プロトタイプング 形成的評価技法
レベル0： ムダのなさ (SMEの要件)	内容の正確さ、取り扱い範囲の妥当性、解釈の妥当性、多義性の提示、情報の新鮮さ、根拠・確からしさの提示、適正な著作権処理	ニーズ分析法 内容分析法 職務分析法
レベル-1： いらつきのなさ (精神衛生上の要件)	アクセス環境、充実した回線速度、IT環境のレベルに応じた代替の利用法、サービスの安定度、安心感	学習環境分析 メディア選択技法

(出所) 鈴木 (2006) 「IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図：eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案」

ライン授業に対する満足度は、オンライン授業の質と関係していることがわかる。

eラーニングの質を5段階に分けて整理したレイヤーモデル (鈴木 2006)⁴ を参考にすると、日本語教育の内容以前に、達成しなければならないことがあることもわかる。

第2節 日本語教師及び学習者への調査内容

1. 調査の概要

本稿は、筆者が行ったアンケート調査やインタビュー調査のデータから分析を行なっている。具体的には a. 2024年2月に実施した日本語教師動向アンケート193名の回答からの結果、b. オンライン授業と対面形式授業の両方を経験している日本語教師2名へのインタビュー (2024年7月)、c. 筆者が対面形式授業を行なっているEPA候補生5名へのインタビュー (2024年8月)、d. 筆者がオンライン授業を行った日本語学習者2名と日本語学習者の父親1名へのインタビュー (2024年6月)、e. 介護の特定技能者向けのオンライン授業を3年間に渡り筆者の法人に継続して依頼する教育担当者へのインタビュー (2024年8月) という5つの調査で収集したデータを用いている。

a. は、コロナ明けの日本語教師の実態を把握するため筆者が独自に行ったアンケートである。調査方法は、筆者が作成したアンケートを、筆者法人が運営する日本語教師アイデア塾に参加している日本語教師計1,300名にメールで送り回答を依頼、またSNSで拡散し回答を

得たものである。

b. は、a. で回答した日本語教師の中から、オンライン授業と対面形式授業の両方を経験している日本語教師をピックアップしオンラインでインタビューを実施した。2名のうち1名は技能実習生が来日後に日本語を学習する研修センターに勤め対面形式授業をしながら夜間の時間を使って就労者向けにオンライン授業を実施する45歳の女性日本語教師Kさん。もう1名は、日本語学校で約3年間対面形式での授業を実施した経験を持ちコロナ禍以降に自身が担当する日本語授業の100%をオンライン授業に切り替えて現在も行なっている63歳の男性日本語教師Tさん。2名ともオンライン授業に積極的な講師だが、その理由をインタビューでヒアリングした。

c. は、2024年4月から筆者が対面形式授業を行ってEPA候補生5名。国籍は、フィリピンとインドネシア。現在、日本で就業して2年目でありコロナ禍にオンラインで日本語授業を経験した学習者。現在、対面形式で日本語を学習している状態と比較し日本語学習者にとってオンライン授業をどのように感じているかを座談会形式でヒアリングを行った。

d. は、筆者が実施したオンライン授業を受講した経験を持つ外国人3名。うち、1名は都内にあるベンチャー企業のアプリ開発会社に就労する中国人の男性Hさん。日本に来日してから約2年が経過している中で、日本語が話せず生活で困ることがあるため会社の福利厚生であるオンライン授業 (授業時間は週2回、1回2時間のオンライン授業) を2023年から2024年の間受講している。開始時は、ほとんど日本語を話すことができなかったが、現在は生活で使う日本語などを中心に簡単な日本語使ってやり取りできるレベルになっている。介護特定技能のインドネシア人1名は、来日前に10日間のオンライン授業を受講。インドネシア人の日本語教師から日本語を学習した経験を持っていた。また、オンライン授業参加前には、筆者の法人が作成した簡単な日本語で介護の基礎知識を説明している動画を視聴した上で、オンライン授業に参加。10日間の研修では介護職としての会話力の向上を目的に受講した。最後は、筆者がオンライン授業を担当する7歳のウズベキスタン人児童の父親である。それぞれ、オンラインでインタビューを行った。

e. は、大阪にある協同組合の特定技能者の採用教育を担当するMさん。筆者の法人にオンライン研修を3年間に渡り依頼。自社より紹介する特定技能者の増加を受け、クラス数やコースの拡大の依頼を受けているが、全てオンラインで日本語授業を行っている。これまでのインタビューの中でオンライン授業に対する意見についてまとめる。

⁴ レイヤーモデルは高等教育におけるeラーニングを検討するために作られたが、eラーニングに限らず教育全般での活用が可能であると鈴木他 (2016) は述べている。

2. 日本語教師動向アンケートの結果

日本語教師動向アンケート調査は、460名の日本語教師を対象に行い、193名の日本語教師から回答があった（回答率41.9%）。アンケート実施期間は2024年2月から2024年3月、アンケート方法はGoogleフォームで作成したアンケートをエルロン社がもつ日本語教師のFacebookグループにアップし回答を呼びかける方法で実施した。アンケート調査の質問項目は、全部で10項目であるが、以下に本稿に関連度が高い項目の結果を記載する。

まず、回答者の属性についての質問に対しては、日本語学校勤務／非常勤講師及びフリーランスと回答した人が43.5%となった。複数を掛け持ちしている日本語教師は常勤ではないと仮定すると、回答者の61.1%が専任ではない働き方を選んでいることがわかる（図2）。また、回答者の日本語教師歴は5年未満が全体の50.3%を占めている（図3）。ここから、日本語教師歴は比較的浅く非常勤やフリーランスとして活動している日本語教師からの回答が多いことがうかがえる。

回答者のうち、全ての授業をオンラインで実施している教師は19.7%に留まり、対面形式よりもオンライン授業の方が多いと回答する教師を含めても29.5%と、コロナ禍と比較すると激減していることがわかる。一方で、全て対面形式授業及び対面形式授業が多いと回答した教師は併せて55%という結果となった（図4）。

図2 回答者の属性

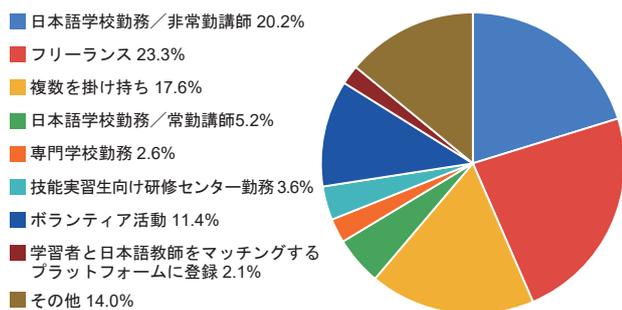


図3 日本語教師歴

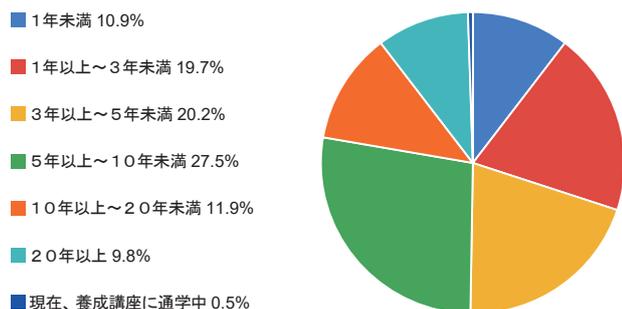
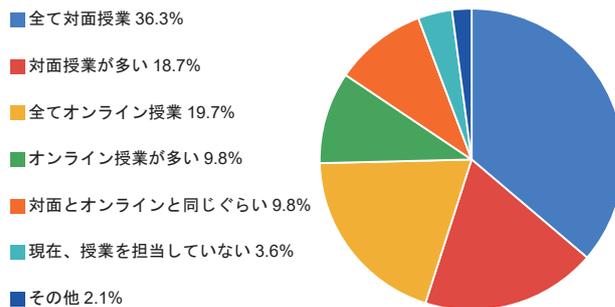


図4 現在担当している授業は対面かオンラインか



3. 40代と60代の日本語教師へのインタビューの内容

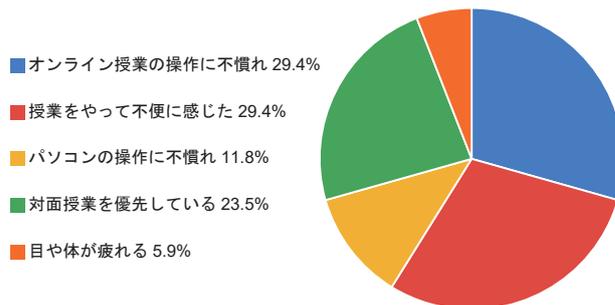
筆者が2023年8月に日本語教師向けにアンケートを行った際、オンライン授業は今後必要だと考えながらもできればやりたくないという声があった。アンケートは、400名の日本語教師を対象に行い、76名の日本語教師から回答があった（回答率19%）。アンケート実施期間は2023年8月の約1カ月間、アンケート方法はGoogleフォームで作成したアンケートをエルロン社がもつ日本語教師のFacebookグループにアップし回答を呼びかける方法で実施した。

オンライン授業を担当したくない理由としては、パソコン操作やZoomを活用した授業への不安が大きい（図5）。しかしながら、仕事を効率的に行い収入を増やしたいという30代から40代の日本語教師の中には、オンライン授業を増やしていきたい、オンラインのみで日本語授業を行っていききたいというコメントがあった。年代別にオンライン授業に対する捉え方が違うのかを把握するため、年代の異なる日本語教師2名にインタビューを行った。

1) 45歳の女性日本語教師Kのインタビュー —対面形式での授業はどこで行っていますか

- ・現在働いている、技能実習生が来日後に日本語を学ぶ研修センターで対面形式授業を行っています。

図5 オンライン授業を実施したくない理由（2023年8月アンケート結果）



—オンライン授業はコロナ明けも行っているとのことですが、どんな授業ですか

- ・IT エンジニアの就労者向けに1回2時間、週2回のペースで行っています。

—Zoom やパワーポイントはオンライン授業を行う前からお使いでしたか？

- ・Zoom は、コロナ禍に練習して使えるようになりましたが、パワーポイントは、頻度は多くなかったのですが以前の仕事の中で使うことはありました。

—対面形式とオンラインを比較して対面形式を優先したいと思いますか

- ・いいえ、そのように感じたことはありません。対面形式は対面形式の良さがありますが、今担当しているオンライン授業でも、対面形式授業とそんな変わらない授業ができています。オンラインだからこそ、引き受けることができる授業もあるので、どちらも続けていきたいと思っています。

—オンライン授業はマイク・カメラオフで受講する学習者が多く、クラスコントロールが難しいと言われますが、Kさんの授業でも同じでしょうか？

- ・私が担当しているオンライン授業は、学習者が5名ということもあるかもしれませんが、マイク・カメラオフのまま受講する方は今まで一人もいません。

授業中は、学習者さん同士が相談したり発話することが多いのですが、みなさん積極的に授業に参加してくれています。ブレイクアウトルームもよく活用しますがブレイクアウトルームでの活動中もみなさん積極的に活動されています。

—オンライン授業は減らして、対面形式授業中心にした方が良いという考え方もありますが、どう思いますか？

- ・オンライン授業でも対面形式授業と変わらない効果が出せているので、オンライン授業を減らした方がいいとは個人的には思わないのですが…

職場によっては在宅勤務が中心という学習者さんがいますし、オンライン授業だからこそ、海外向けに受講ができるというメリットも多いので、オンライン授業がもっと普及してほしいと感じます。

2) 63歳の男性日本語教師 T のインタビュー

—Tさんは、コロナ禍以前は、全て対面形式で日本語

授業をしていたそうですが、オンライン授業に切り替える際、不安や抵抗は感じなかったですか？

- ・すごく感じました。日本語授業をオンラインでやるなんて、そんなのいい授業はできない、無理だと上司に言いましたが、上司からオンラインでできるようにしてほしいと言われ渋々取り組みました。でも、Zoomの使い方がよくわからなくて…これは大変なことをさせられるなど感じていました。

—今は担当する日本語授業の100%がオンラインだと聞きましたが、乗り越えたんですね？

- ・はい、そうですね。Zoomは、一緒に授業を担当する日本語教師同士で何度も繰り返し練習しました。私が行っていた対面形式授業の中では学習者同士が相談しあったり練習したり、ディスカッションしたりすることが多い授業をしていたので、それと同じ授業をするためにブレイクアウトルームを使う必要があったのですが、これが本当に難しかったです。間違っただけでZoomから退出してしまうことはしょっちゅうでしたし、授業しながらブレイクアウトルームに自分で飛ばすことが難しく大変でした。はじめは、日本語教師同士でお互いの授業にサポートに入って、助け合いながら行っていました。時間をかけて練習してできるようになりました。

—対面形式とオンラインを比較して対面形式を優先したいと思いますか

- ・全然思いません。歳を重ねるごとに、教科書やパソコンを持つての移動が辛くなってきているということもありますが、オンライン授業は、今まで移動時間に充てていた時間を授業準備時間にすることができず、授業終了後、すぐに他の作業をすることができますし、仕事として効率はかなりいいと思います。

—オンライン授業はマイク・カメラオフで受講する学習者が多く、クラスコントロールが難しいと言われますが、Tさんはいかがですか？

- ・授業中ずっとマイク・カメラオフで、授業に参加しない学習者がいると聞いたことはありますが、私の授業では今まで一人もいません。

—どうして、マイク・カメラオフの学習者がいないのでしょうか？

- ・私の授業は、学習者同士が話合う頻度が多いのですが、会話をする時に返事をしなかったり、顔を

見せないのは失礼だということを伝えています。学習者はそれを理解して授業に参加してくれています。マイク・カメラオンにする重要性が学習者に伝われば協力してくれます。

—オンライン授業は減らして、対面形式授業中心にした方が良いという考え方もあると思いますが、どう思いますか？

・対面形式授業と同じようにオンライン授業はできますので、減らす必要はないと思います。日本語学校など、対面形式授業が優先という場合もあると思いますが、今後コロナ禍のようなパンデミックがまた起きてしまう可能性もあります。

コロナ禍、多くの日本語教師が職を失ったのを見てきたので、オンライン授業を今減らしてしまうよりは、オンライン授業もできる日本語教師が多く育つことが重要だと思います。

特に、私のような高齢者が日本語教師という仕事を続けていくには、オンライン授業ができる力を磨くことはプラスが多いです。日本語教師のみなさんに、オンライン授業が練習できる場所があればいいのかもしれないですね。

2名の日本語教師の話から、Zoom やパワーポイントなどを使った教材に慣れることがオンライン授業を行う上では必要不可欠であることがわかるが、Tさんの話から練習すれば自信を持って取り組むことができることがわかる。

また、学習者中心・協働学習スタイルの授業はオンライン授業でも実現でき、年齢問わず効果的な授業を行うことができる。ブレイクアウトルームなど活用しながら、学習者が発話や対話することができる授業をすることで、学習者も授業に積極的に参加している。クラスコントロールの難しさは、授業スタイルを変えることで解消できると言える。

4. EPA 候補生 5 名との座談会インタビューの内容

—オンラインで授業を受けたことがありますか？

・(全員) はい、あります。コロナ禍に日本にきたので、日本語の勉強はほとんどオンラインでした。

—オンラインで日本語を勉強することについて、どう思いますか？

・対面形式授業ができない理由がある時は仕方がないが、オンラインで日本語を勉強することはした

くない。

—5人みなさん、同じ考えですか？

・(全員) はい、同じです。

—どうして、オンラインで勉強したくないですか？

・今までのオンライン授業は、外国人が100人くらい参加して、日本語の先生が一人で授業をしていた。先生が問題を読んで答えを説明してくれる授業で、3時間くらい授業を受けるが、3時間は長すぎて集中できない。集中できるのは1時間くらいだと思う。授業中、時々、先生から名前を呼ばれてあてられるけど、先生は私の顔がわからない。マイク・カメラオフにしていれば、質問されても次の人に答えを聞いていたので、よくないと思っていたけど、聞くだけにしていることが多かった。

・オンラインで聞く授業は、勉強しようと言う気持ちになかなかない。

勉強する場所に移動することで、勉強する気持ちになるので、オンラインより対面形式で勉強したいと思う。

・先生の日本語が難しくわからないことが色々あったけど、質問できない。

対面形式は質問しやすいから対面形式がいい。

—オンライン授業のやり方に問題がありそうですね。例えば、次のようなオンライン授業だったら、参加したいと思いますか？

学習者は16名以下、今対面形式でしているような学習者中心・協働学習スタイルの授業で、ブレイクアウトルームを使ってグループで調べたり話し合ったりして、わかったことを発表しながら学ぶオンライン授業(筆者が行っているオンライン授業のスタイルを紹介)

・(全員) それはいいと思う。

・日本に来る前に、同じようなオンライン授業を受けたことがある。会話を練習するための授業だったが、それは本当によかった。

・授業時間は、どのくらいですか？(筆者回答:1回2時間はどうですか?)

オンラインで日本語を勉強するとき、本当に疲れるので、1時間か1時間半くらいがいいと思う。でも話すことが多いから、2時間でも大丈夫かもしれない。

5名の回答内容から、学習者がオンライン授業を望まない理由は、授業に参加する必要性を感じさせない授業スタイルに課題があることが明らかになった。日本語教師が説明する授業を、大人数で長時間聞くとスタイルは、学習者にとって有益な授業スタイルではない。オンライン授業でも、学習者中心・協働学習スタイルの授業をすることで学習者の積極性を引き出すことができるのではないか。また、学習者と相談し、受講人数や授業時間を調整することも重要なポイントになると考えられる。

5. 筆者のオンライン授業を受講した3名の外国人インタビューの内容

1) 都内にあるベンチャー企業のアプリ開発会社に就労する中国人の男性Hさん

仕事はほぼ在宅勤務で、出社は1ヶ月に1回程度なので、日本語はオンラインで勉強したい。オンラインで勉強して会話できるようになったのでとても満足している。これからも、オンライン授業を続けていきたい。

2) 来日前の介護特定技能のインドネシア人Sさん

今まで、インドネシア人の先生から日本語を勉強してきたから、日本語を話すことが少なくて会話が上手くないことが心配だった。オンラインで日本人の先生が授業をするのはとてもいい。16名一緒に勉強して本当に楽しかった。

日本語で介護を勉強することは難しいけど、みんなと話して勉強するのが楽しかった。介護の言葉を沢山覚え、日本語が話すこともできるようになった。

インターネットが悪い時、勉強できなくて大変だけど、オンラインでの勉強はとても良かった。

3) 7歳のウズベキスタン人児童の父親

オンライン授業は、慣れている。子どもはウズベキスタンの言葉や文化を勉強するためオンラインで勉強しているから問題ない。下の子が赤ちゃんで、母親が送り迎えができないので、対面形式での日本語レッスンははじめから希望していなかった。沢山の知り合いや、市役所に相談してオンラインでしっかり勉強できるところを探したがなかなかなくて困った。今のレッスンに大変満足している。

筆者が行うオンライン授業を受講した様々な属性の学習者から、オンライン授業について好意的な意見が出ている。ここから、オンライン授業に合う授業スタイルとそうではないスタイルがあることがわかる。

6. 筆者にオンライン研修を依頼する法人担当者Mさんへのインタビュー内容

できれば、対面形式で授業をしてほしいというのが本音としてはあった。だが、研修を依頼したい先が東京の法人で、自社が大阪にあること、また特定技能で働く外国人の中には地方在住の者もあり、1か所に集めて集合研修をすることも現実的ではなかったため、石川さんからの様々な説明を受けてオンライン研修の開講に踏み切った。結果としては、非常に良かったと感じている。良かった点としては、関西、関東と様々なところに配属されている特定技能者が、研修にアクセスしやすいということ。また、配属先によっては、外国人が一人とか二人という場合もあるため、オンライン研修で顔を合わせることで、みんなで頑張りようという気持ちが出てきていることを面談で感じ、良い効果があると感じた。

研修の動画を見たところ、受講者が話し合いながら課題に取り組み、仕事をする上で必要な専門用語を覚えたり、覚えた言葉を使って必死に説明し、質問しあったりして日本語を勉強している姿を見て驚いたし、オンラインで研修することへの懸念も払拭された。当初、コロナが明けたら対面形式の研修にすることも考えていたが、今はこのままオンラインでの研修を継続させたい。

こちらの法人の担当者は、オンラインでの研修に対して「よくないのではないか」という漠然とした懸念を持っており、対面形式研修を希望されていた。実際のオンライン授業の様子や受講者の成長から、その懸念は払拭された様子だった。このように、漠然とよくないのでは、とオンライン授業を懸念する法人はコロナ禍非常に多かったが、現在はオンラインで日本語研修を依頼したことがあるが、よくなかったので、対面形式授業を希望したい、という声も聞かれる。

第3節 オンライン授業の拡張発展に向けた課題の分析

オンライン日本語授業を拡張発展させるための課題として、大きく2点の課題がある。一つ目は、日本語教師のZoomやデジタル教材に対する苦手意識。二つ目は、学習者が参加しなくても進んでいくオンライン授業は日本語学習者の学習意欲の低下を招くという点である。

1. 日本語教師のZoomやデジタル教材に対する苦手意識についてだが、レイヤーモデルを参考にすると、オンライン授業の質の維持のためには達成する必要がある指標があることがわかる。「レベル-1 いらつ

表 1 日本語教師及び学習者への調査内容まとめ

対象	授業スタイル	1回の 受講人数	ポジティブ意見	ネガティブ意見
日本語教師 45歳女性 フリーランス	Zoom <使用機能> 画面共有 ブレイクアウトルーム チャット	5名	・対面形式授業とそんな変わらない授業ができて いる ・引き受けることができる授業が増えた ・海外向けに受講ができるというメリットがあ る。オンライン授業がもっと普及してほしい	なし
日本語教師 63歳男性 フリーランス	Zoom <使用機能> 画面共有 ブレイクアウトルーム チャット	2~20名	・大荷物を持って移動する必要がない(身体が楽) ・今まで移動時間に充てていた時間を授業準備時 間にできる(仕事の量向上) ・授業終了後、すぐに他の作業をすることができ る(仕事の効率向上)	Zoom 操作を覚えること への不安が大きかった
学習者 EPA 候補生 5名	Zoom <使用機能> 画面共有	100名	なし	・3時間は長すぎて集中 できない ・授業中、時々先生から 当てられるが、先生は 私の顔がわからない ・マイク/カメラオフにし ていけば当てられない
学習者 中国人 IT エンジニア	Zoom <使用機能> 画面共有 ブレイクアウトルーム チャット	5名	・週2回オンラインで日本語勉強して会話できる ようになった ・オンライン授業にとっても満足している。 ・これからも、オンライン授業を続けていきたい	なし
学習者 来日前 インドネシア人 特定技能介護	Zoom <使用機能> 画面共有 ブレイクアウトルーム チャット	16名	・日本語を話すチャンスがなかったので、オンライ ンで日本人の先生が授業をするのはとてもいい ・16名で話して(グループワーク)勉強するのが 楽しい ・介護に関連する日本語を沢山覚えたり、日本語 が話すこともできるようになった	・(来日前のため)イン ターネットが悪い時、 勉強できなくて大変
学習者 保護者 7歳児童の父親 ウズベキスタン	Zoom <使用機能> 画面共有 ホワイトボード	ブライ ベート	・子どもは母国の言葉や文化を勉強するためオン ラインで勉強しているから、オンライン学習は 問題ない ・乳児がいて、母親が送り迎えができないので、 対面形式での日本語レッスンははじめから希望 していなかった ・今のレッスンに大変満足している	なし
研修発注先 法人 教育担当者	Zoom <使用機能> 画面共有 ブレイクアウトルーム チャット	3~16名	・様々なところに配属されている社員が研修にア クセスしやすい ・受講者が話し合いながら課題に取り組み、仕事 をする上で必要な専門用語を覚えたり、覚えた 言葉を使って必死に説明し、質問しあったりし て日本語を勉強している姿を見て驚いた ・オンラインで研修することへの懸念も払拭された	・対面形式研修を希望し ていたのでオンライン で実施するか迷った

きのなさ」では、オンライン授業環境が学習者にマイナスの影響を与えていないかどうか確認することが挙げられる。日本語教師が Zoom やデジタル教材に不慣れである場合、このレベル-1は達成されない。63歳の男性日本語教師 T (以下、日本語教師 T) へのインタビューから、これまで自身が使ったことのない Zoom を使った授業は、「やりづらい」「やりたくない」と感じたことがわかる。日本語教師 T は、日本語教師同士で Zoom 操作を何度も練習してきたという。その成果として、今ではオンライン授業に対する「やりたくない」という感情は消滅し、担当する授業全てをオンライン授業で提供し、将来的にも対面形式授業を優先したいとは感じていない。これは一つの成功事例である。

筆者が運営する日本語教師コミュニティにおい

ても、日本語教師が自主的に集まり Zoom 操作について日本語教師同士相談したり操作練習をしたりしている。

オンライン授業を拡張発展させていくためには、日本語教師が自由に練習できるプラットフォームを増やしていくことが必要である。

2. 学習者が参加しなくても進んでいくオンライン授業の改善については、レイヤーモデルの「レベル2 学びやすさ」と「レベル3 学びたさ」を取り上げて考える。「レベル2 学びやすさ」は、学習課題の性質と学習者の特性に応じた学びやすさを追求すること。分かりやすさのレベルを超えた達成指標として、学習者のアクティビティのデザインや協同(協働)的学習も視野に入れるとある。また、「レベル3 学び

たさ」は、学びがいや帰属意識、没入感や継続的学習意欲を目指すことが挙げられている。この点、オンライン授業を今後も希望すると回答した学習者と、オンライン授業は希望しないと回答した学習者が経験した体験内容からも違いがわかる。

オンライン授業は希望しないと回答した学習者は、100名が一度にZoomに入り、自分が授業に参加しなくても進んでいくという授業を経験した。100名が同じ画面に参加しているが、とても孤独に感じたというコメントも一部の学習者からあった。このオンライン授業を例にすると、協同（協働）した学びはなく、学びがいや帰属意識、没入感を感じられなかったことが、学習意欲の低下を招いたと推察できる。

一方で、オンライン授業を今後も希望すると回答した学習者は、学習者が中心となり協働学習で進んでいくオンライン授業を経験し、満足していると回答している。学習する内容についても、学習者が従事する業務と直結する日本語学習が受けられることも満足している理由に含まれるが、共に学べる相手がいって楽しかったと言う声もある。協同（協働）学習が達成され、学びがいや帰属意識、没入感を感達成されたことで、学習意欲が持続したと分析できる。

オンライン授業を担当する日本語教師のやりづらさの中に、学習者のクラスコントロールの難しさがあり、特にマイク・カメラオフで参加する学習者が多い授業におけるクラスコントロールの難しさを感じている日本語教師は多いが、学習者が中心となり協働学習で進んでいくオンライン授業においては、クラスコントロールの難しさを課題に上げる日本語教師の意見は見られない。

オンライン授業の実施方法をレイヤーモデル「レベル2 学びやすさ」「レベル3 学びたさ」を達成する方法で実施することは非常に重要である。この点は、文部科学省が進める登録日本語教員制度に関連する、日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針（令和2年6月23日閣議決定）の中で「地域に在住する外国人が自立した言語使用者として生活していく上で必要となる日本語能力を身に付け、日本語で意思疎通を図り、生活できるよう支援する必要がある教育の質を求めると提示されている。日本語教育の質向上に向け取り組まれる要件とも一致する点であるため、今後オンライン授業で実施される日本語教育の内容（質）が変わることは期待できると言える。

第4節 考察

オンライン授業は対面形式授業の代替であり、日本語

授業においては対面形式授業が優先されることが多いが、今回の調査から教師のオンライン授業の技術向上や学習者中心の授業設計という2つの課題を解決することで、拡張発展させることができることがわかった。対面形式授業が従来の授業スタイルとして確立されてきた日本語教育において、Zoomやデジタル教材活用の習得に負担を感じる日本語教師がいることは事実である。そのため、Zoomなどのスキル習得のためには一定の時間と手間が必要だが、オンライン授業のスキルを身につけることで日本語教師として、より長く継続して日本語教育の現場に立つことができる。また、一人の日本語教師が、過疎地や地方に住む外国人家族や外国人財に必要な日本語教育を届けることが可能となり、加えて、来日前の日本語学習者にも質の高い日本語教育を届けることも可能になる。

2024年に入り日本語教育の必要性や重要性が増す中で、日本語教師の数の確保に関する問題は深刻化してきている。日本語教師の育成は急務ではあるが、オンライン授業の拡張発展が打ち手の一つになると考えられるのではないかと。

また、将来的に再びパンデミックのような状況になった場合でも、オンライン授業のスキルを日本語教師が身につけておくことで、日本語教育関係者の経営や収入を安定させることもできると考える。

対面式授業の代替として、やむを得ずオンライン授業を実施するという考えではなく、効果的なオンライン授業ができる日本語教師を育成し、オンライン授業の拡張発展に向け継続した準備を進めていくことが必要だと考える。

参考文献

- 藤本かおる（2019）、『日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究—担当教師へのインタビューを中心に—』JeLA学会誌 Vol. 19
- 末繁美和（2022）、『日本語教育副専攻コースにおけるオンライン実習の試み—日本語教師に求められる資質・能力の養成を目指して—』岡山大学教師教育開発センター紀要 第12号 別冊
- 河内彩香（2021）、『【実践報告】教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか—ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育—』河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘 多文化社会と言語教育 Vol. 1
- 鈴木克明（2006）、『IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図：eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案』
- 伊東祐郎（2021）、『コロナ禍におけるオンライン日本語教育実習』